

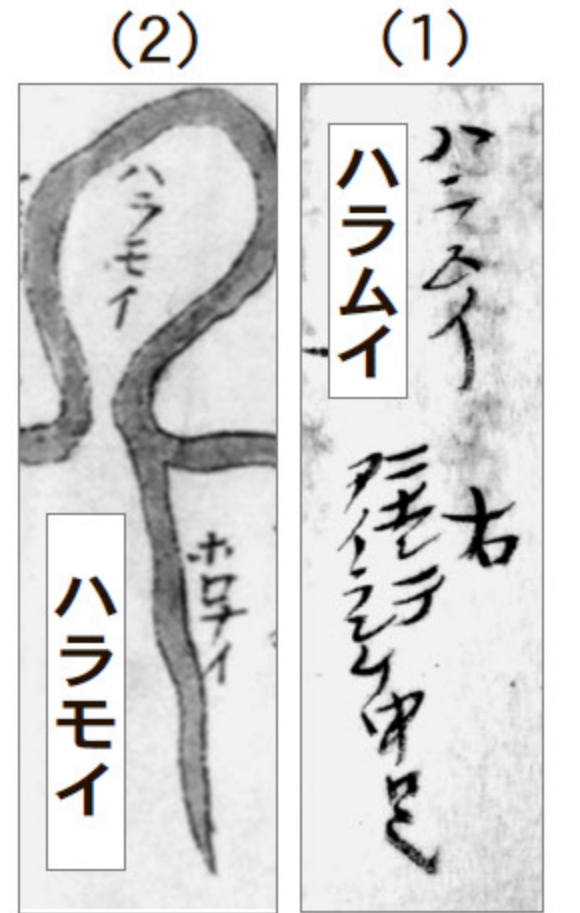
前回は、安政四年(一八五七年)に、上川(旭川)を調査した松浦武四郎は、アイヌの人たちに地名を聞いた時は、その地名と共に、教えてくれたアイヌの人たちの名前を必ず記録していたことを紹介した。その時は、その土地を熟知した地元アイヌの人に尋ねたのである。

カムイコタンに到着前のナイタイ(現・内大部川)までは、丸木舟を漕ぎ、案内してくれた石狩川中流のトツク(現・新十津川町)の首長のトミハセとセツカウシに聞き、ナイタイベから掲載図の「現・神居古潭」のハラモイ(para-moy 広い・湾)までは、上川の二ホンテとアイランケに尋ねた。写真①の(1)が、松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート)『巳第二番』に書いたハラモイの記録である。

# 断章 旭川のアイヌ語地名研究

55

高橋 基



①(1)『巳第二番』 (2)『蝦夷地図』

(1)ハラムイー右

二ホンテ 申口也  
アイランケ

これは、「ハラムイ」(para-muy 広い・箕)―(上流に向かって)右岸―二ホンテとアイランケが述べたという意味である。実は、このハラムイはハラムイという表記は、松浦武四郎のこの記録が唯一のものなのである。

## 旭川のカムイコタン⑫

そのハラムイの意味を考察したい。

まず最初に、明治二十三年に調査した永田方正と、昭和三十五年の知里真志保の地名解を紹介する。

(永田地名解)・ハラモイ(para-moi 広湾)―カムイコタンの激湍此処に至りて川幅広くして湾流し、流水始めて穏やかなり。ハラモイは、広き静処とも訳すべし。(註―para-moi-広い・静かである・所)  
(知里地名解)・ハラモイ(para-moi 広い・湾)―ポロモイ(poro-moi

大きい・湾)と呼ぶ人もある。神居古潭のトンネルの下。(註―トンネルは、旧国鉄函館本線のトンネルで、掲載図の「現・神居古潭」にも見える)

旭川のカムイコタンのハラモイに關しては、右の永田地名解が、最も簡潔で的確な説明と言える。

さて、二ホンテとアイランケが松浦武四郎に教えた地名の「ハラムイ」は、「ハラムイ」(para-muy 広い・箕)であった。本来のムイ(muy)は、「箕」↓穀物をあおりふるって、からやゴミをより分ける農具であるが、アイヌ語地名では、モイ(moy 湾)入

江)の訛り、転訛として残っている。知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』にも、「モイ(moy 浦)のなまり」と記載されている。積丹町の島武意↑スラムイ(suma-muy 石の・箕↑元来は、スラムイ suma-moy 石でできた・入江)が、代表的な例で、海岸部に多い。

ハラムイは、松浦武四郎が残した写真②の地図にも描かれている。海岸部に多い、「ムイ(muy 箕)」地名が、何故、内陸部の旭川のカムイコタンにあるのか?それは、これまで見てきたように、ポロレプシペ(poro-rep-us 大きい・沖・にしている・者―岩)のように、カムイコタンまでが、海であったという伝説と深い関係があるであろう。その意味でも、非常に興味深い記録である。

他方、写真①の(2)「ハラモイ」も、本連載⑤の文化七年(一八一〇年)の『蝦夷地図』で見たように、「ハラモイ」ハラモイ(para-moy 広い・湾)も、古くから見られた呼称であったことも分かる。一つの地名に、複数の呼称がある典型的な例である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します



現・神居古潭



②『東西蝦夷山川地理取調図』